

『佐賀の宝箱～有明海にすむ生き物たち』

○第4学年「季節と生き物」での1年を通した生物の観察に活用できます。また、第5学年の「流れる水のはたらき」の平野部を流れる川が運搬するものについてや、第6学年の「生物と自然環境」の学習においても活用できます。

ムツゴロウ

小城市の南に位置する有明海。有明海のシンボリック的存在、ハートの目がかわいいムツゴロウは、日本では有明海と八代海の一部にしかすんでいません。ムツゴロウは、エラと皮膚の両方で呼吸ができる水陸両生魚です。潮が満ちると、泥に掘った巣穴に潜ります。6～7月には、干潟をのそのそと這い回り、珪藻類を削り取るように食べる愛らしい姿が最も多く見られます。また、5～7月の産卵期は、オスがメスにプロポーズするためジャンプする姿を見ることができます。巣穴の深さ20～30cmのところ横穴を掘り、その天井に1万個ほどの卵を産み付けます。一週間ほどでふ化しますが（3mm）、それまではオスが卵の世話をします。



間近で観察できます。
芦刈町住ノ江の干潟にて

シオマネキ

干潟の中でも、大潮でないと潮がこないような地盤の高いところに巣穴を掘ってすんでいます。いつもは同じ巣穴にすみ、巣穴の周辺を守っていますが、時として巣穴を捨てて放浪することもあります。放浪している時に潮が来ると、近くにある適当に空いた巣穴に姿を隠します。オスは、片方のはさみが肥大化していて、これを動かす格好が潮を招いているように見えることから、「シオマネキ」と名前がついたと言われています。オスの大きなはさみは、右に付いているものと左に付いているものがほぼ半々の割合でいます。6～7月の繁殖期には、はさみを上下に振って求愛ダンスをするオスの姿を見ることができます。



ワラスボ

有明海の「エイリアン」といえばワラスボ。ムツゴロウと並ぶ有明海の珍魚です。かわいらしいムツゴロウと違って、内蔵や血管が透けて見えるような紫色で気味悪いうなぎ状の体と、歯がむき出しで凶暴そうな顔がインパクト大のハゼ科の生物です。日本では有明海にしかすんでいません。干潟のやわらかい泥に巣穴を掘ってすんでいます。目は退化して皮膚の下にかくれてしまっており、鱗も痕跡が残っているだけです。ワラスボは肉食で、潮が満ちると巣穴から出てきて、エビやカニ、小魚や貝類（特にアゲマキ）など何でも食べます。ムツゴロウと同じで、卵がふ化するまではオスが卵の世話をします。



【参考】 「サガンさかな」佐賀県水産局／発行